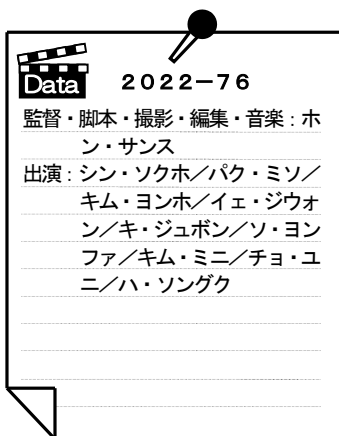




## 👁️👁️ みどころ

「うまい、安い、早い」を“売り”にするホン・サンス監督の快進撃が続いている。わずか66分ながら、3話構成をとる本作の主人公は、若い男と若い女。キム・ミニは第1話の“ちょい役”だけだ。

会話劇の面白さは3話を通じて際立っているが、3話共通のテーマは抱擁！韓国での男女のそれは、西欧式の挨拶とは異なるものだから、それぞれどんな意味が？それをしっかり考えたい。

なお、本作ではやたらタバコを吸うシーンが目立つが、今ドキこれはちょっとまずいのでは・・・？

—— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* —— \* ——

## ■□■ホン・サンス監督最新作2作を同時公開！■□■

「うまい、安い、早い」は吉野家のキャッチフレーズだが、それと同じ“売り”で素晴らしい作品を、大量に、早く作り続けてきた韓国の監督が、キム・ギドクとホン・サンス。残念ながらキム・ギドクは2020年12月11日に亡くなったが、ホン・サンスはなお健在！

『シネマ42』では、「ホン・サンス監督×女優キム・ミニ4作品を一気に！」の見出しで『それから』(17年)、『クレアのカメラ』(17年)、『正しい日 間違えた日』(15年)、『夜の浜辺でひとり』(17年)を、『シネマ49』では、「ホン・サンス監督新旧3作」の見出しで、『逃げた女』(20年)、『カンウォンドのチカラ』(98年)、『オー！スジョン』(00年)を収録したが、今回は彼の最新作『イントロダクション』(20年)と『あなたの顔の前に』(21年)が同時公開！こりゃ、必見！

前者は66分、後者は85分と、今ドキの映画にしては短いから、当然両者を続けて鑑賞することに。

## ■□■ベルリン銀熊賞（脚本賞）の長編25作目は3部構成で■□■

『ドライブ・マイ・カー』（21年）（『シネマ49』12頁）に続く、濱口竜介監督の最新作『偶然と想像』（21年）（『シネマ50』163頁）は、3つの短編で構成するはじめての試みだった。それに対して、ホン・サンス監督の第24作目、『逃げた女』はホン・サンス監督のミューズたるキム・ミニ演じるガミと3人の女との3部構成の会話劇だった。女同士の会話は男同士のそれとは違う独特のものがあるが、男のホン・サンス監督がそれに通じているのは一体なぜ？多くの観客や批評家にそう思わせるホン・サンス監督の力量はさすがで、同作のタイトルを『逃げた女』としたことの意味を含めて、銀熊賞（脚本賞）の受賞は当然と納得させられた。

本作もそれと同じような3部構成になっている。本作の主人公は、本作が初主演となるシン・ソクホが演じる若い男ヨンホと、同じく本作が長編デビュー作となるパク・ミソ演じる若い女ジュウォンの2人。ホン・サンス監督の公私にわたるミューズであるキム・ミニは第1話にちょっと出るだけだ。

濱口監督の『偶然と想像』は、タイトル通り偶然と想像という統一テーマの下に、全く異なる登場人物による3つの短編で構成されていたが、本作は3章に分けられた物語すべてにヨンホとジュウォンが登場する。もちろん、3つの章はそれぞれ舞台も違うし、年代も違っているから、そこには若い2人の成長の姿も読み取れるが、そんな本作がなぜ脚本賞を？

## ■□■タイトルの意味は？3話を通じて抱擁が！タバコが！■□■

「イントロダクション」という英語は定着している英語だが、『イントロダクション』と題された本作を日本語でどう翻訳するかは意外に難しい。ちなみに、ドリス・デイが歌って大ヒットした『ケ・セラ・セラ』では「アイ イントロデュース ハー」という歌詞があり、それは「紹介する」だが、本作の「イントロダクション」は、さて？

本作のパンフレットには、芝山幹郎氏（評論家）の「そうだったのかと気づくことと、なんだったのだらうと思うこと」と題するコラムがあり、その最初に「そもそも『イントロダクション』という題名が曲者だ。「初対面」とも「人生の入り口」とも訳せそうだが、どちらの訳語もちょっとずつずれる。むしろ、シーンによっていろいろなニュアンスが重なり合う。ひとつの色に無理やり絞り込む必要はなさそうだ」と書いているが、なるほどその通り。

さらに、3部構成を取る本作では、スクリーン上に1、2、3とはっきり表示されるが、それはなぜ？それについても、芝山氏はさまざまな解釈を試みている。それはそれで興味深いが、私が3部構成をとる本作全体を通して目立つのが、第1に抱擁、第2にタバコだ。第1部では、病院経営者の父親を訪れた息子のヨンホがいきなり看護師と抱擁を交わすシーンにビックリ！これは一体なぜ？第2部の抱擁は、衣装デザインを学ぶためドイツのベ

ルリンまでやってきたジュウォンと、離れて1日しか経っていない彼女を追いかけてきたヨンホが道端で抱擁するシーンだが、これには十分納得。そして、第3部にも抱擁シーンが登場するから、それにしっかり注目！

もう一つ、本作は全編を通じてタバコを吸うシーンがやけに目立つが、これは一体なぜ？ 私思うに、それはきっと彼の心の中のイライラぶりを示すとともに、彼の決断力のなさを象徴するのだろうが、今ドキこれは青少年の教育上よろしくないのでは・・・？

### ■□■この父子の関係は？なぜ看護師と抱擁？■□■

第1部に見る、韓方病院の院長であるヨンホの父親（キム・ヨンホ）はかなり羽振りが良さそう。今日は患者としてやってきた有名な俳優（キ・ジュボン）と親しげに会話を交わしているため、息子のヨンホがやってきても、「待たせておけ！」でoshiまい。この父子関係は断絶状態とまでは言わなくても、あまりよくないらしい。

導入部に登場するヨンホとジュウォンの挨拶ぶりを見れば、ジュウォンはヨンホの恋人のようだ。ところが、第1部のラスト近くでは、待ちぼうけを食わされている間、看護師（イエ・ジウォン）とたわいもない会話を交わしていたヨンホは、その看護師と抱擁を交わすので、アレレ。これは明らかに西欧式の挨拶としての抱擁とは違うものだから、ひょっとしてこの2人は以前から・・・？

そんな思いを巡らせている中、ホン・サンス監督は、外で雪が降っている風景を見せる中で第1部を終わらせてしまうから、これも一つのテクニック・・・？

### ■□■第2部の舞台はベルリン！キム・ミニも登場！■□■

ホン・サンス監督作品の舞台は、韓国の「江原道（カンウォンド）」が多いが、海外を舞台にしたものもあるし、主人公に外国人を起用したものもある。ちなみに、『夜の浜辺でひとり』（17年）（『シネマ42』299頁）の後半は、江陵（カンヌン）が舞台だが、前半の舞台はドイツのハンブルクだった。また、『クレアのカメラ』（17年）（『シネマ42』290頁）では、フランス人女優イザベル・ユペール扮するフランス人観光客クレアが主人公で、彼女が持つカメラがストーリーの核を構成していた。

しかして、本作第2話の舞台はドイツのベルリンだ。第2部は、ジュウォンが母親（ソ・ヨンファ）と一緒にベルリンの住宅街を歩いているシーンから始まる。ジュウォンは、衣装デザインを学ぶためドイツにやってきたものの、まだ到着したばかりで住む部屋が見つかるまでは知人の画家の家に居候させてもらうらしい。母娘のそんな会話劇が進んでいるところに、突然ヨンホから電話が。韓国とドイツは距離が遠いし、時差もかなりあるから、そう簡単に行き来できるところではない。しかるに、あの若い青年ヨンホは離れて1日しか経っていないのに、寂しくてたまらず、ベルリンにやってきたらしい。私も学生時代、夏休みで帰省する彼女を見送るため、港まで一緒に行き、そのまま一緒に船に乗って彼女の家まで同行するという“愚行”をしたことがあるが、本作に見るヨンホの行動もそれと

同じような（それ以上の？）“愚行”だ。もっとも、心細い気持ちでいっぱいだったジュウォンが嬉しかったのは当然で、2人は道端で抱き合ったが、さて、その後は？

ここでもホン・サンス監督は、その後の2人のストーリーを見せてくれないから、それは自分で想像するしかない。

### ■□■海辺の海鮮料理店ではどんな会話が？登場人物は？■□■

第3部の舞台は、韓国ではおなじみの海辺にある海鮮料理店。そこで料理をつまみ、酒を飲みながら会話を交わしているのは、ヨンホの母親（チョ・ユニ）と第1部に登場していた俳優だ。第3部がなぜそんな物語になっているのかは、2人の会話を聞いていると少しずつわかってくる。要は、かつては俳優を志したこともある中途半端な息子を心配する母心だ。したがって、そこにヨンホを呼んだのは、そのきっかけになった旧知の俳優からヨンホに説教をしてもらうためだが、車でやってきたヨンホは関係のない友人を伴って席に座ったから、アレレ……。ヨンホも友人も、もう少し空気を読む必要があるのでは……？

そこから合計4人で始まる焼酎の飲みっぷりに注目！これでは、まともな会話になるはずはない。しかし、第3話の抱擁シーンは？そう思っていると、友人と2人で海辺に座るヨンホの前に突然ジュウォンが登場してくるから、これは一体なぜ？そして、そこでもヨンホとジュウォンの抱擁シーンが登場するが、これは一体ナニ？ひょっとして、これは夢？幻？

2022（令和4）年7月11日記